

「一分一秒の関わり」

私にとって看護とは、“一分一秒の関わり”であると考えている。このことは、実習を通して学ぶことができた。私は各論実習の時、わからないことがあれば教科書に載っているとばかり思っていた。忙しさや慣れないことばかりで、看護をしなければならぬという思いが強く、自分中心、指導していただいたことをするので精一杯であった。毎日そのことの繰り返しで、周りなどあまり見ることができていなかった。

私を変える出来事があった。それは、老年領域で認知症の A さんと出会ったことである。A さんは、私の受け持ちの方ではなかったが、関わる時間も多かった。A さんは毎日、「今何時?」「ご飯は?」という発言を繰り返していた。その他にも、「私の名前は?」「どこに住んでいる?」という発言の繰り返しであったため、私は、「A さんですよ?」「〇〇に住んでいるですよ?」と返答する日々であった。正直、なぜ毎日同じ発言をしているのかも疑問であったが、ただ言っているだけであると勝手に解釈していた。ある時、A さんに対して「あなたの名前は?」と尋ねるようになった。そのため、私は、自分の名前を伝えた。A さんは私の名前を一回呟いた。その後も同じ質問を繰り返し、私の名前を尋ねる日々が続いた。私以外の施設の方にも毎日同じことを繰り返していたため、忙しい従業員の方は面倒くさそうであるようにも見えた。A さんは施設の方の手を止めるような行動をよくしており、どうしてこんな迷惑をかける行動をしているのか私には分からなかった。

しかし、実習最終日すべての疑問が解決した。私は思い切って A さんに、どうして毎日同じことを繰り返すのか質問した。A さんは、「忘れないように。」と答えた。認知症で自分の名前や家を忘れないように質問して確認していたのだと分かった。認知症になり、孤立感や不安の中で自分の居場所を必死に探そうとしており、様々なことを忘れていく恐怖と闘っていることに気付くことができた。そして、私の名前を聞いてきたことも、“忘れないように”という意味があったことに気づいた時は、涙が止まらなかった。数分後には覚えていたことも全て忘れてしまう。そのことを分かっているため何度も何度も同じ質問を繰り返す。A さんなりの生き方を知った。

このことから、見えることだけに目を向けるのではなく、見えないところにこそ本当の思いがあり、一日という大きな区切りで関わるのではなく、一分一秒という単位で関わっていくことが看護であると考えている。たとえどんなに忙しくても、不安と闘っている人に対し、少しでも多く傍にいる時間を作っていけるような看護をしていきたい。